モスクワ JF 講座オリジナル評価ガイドラインの開発

阿部弘

モスクワ日本文化センター

1. はじめに

国際交流基金モスクワ日本文化センター（以下、JF モスクワ）は、2008 年 11 月全ロシア国立外国文献図書館「国際交流基金」文化事業部で一般向け日本語講座を開講した。そして、2011 年 9 月よりモスクワ市立教育大学との共催のもと、JF 日本語教育スタンダード（以下、JF スタンダード）に基づく JF モスクワ日本語講座（以下、JF 講座）に移行した。JF 講座では、年 2 回（春学期・秋学期）新規の受講生が募集される。A1 から B1 レベルの全 5 コースが開講されており、3 年間で全課程が終了する。教科書は、『まるごと-日本のことばと文化-』（以下、『まるごと』）の入門(A1)、初級 1(A2)、初級 2(A2)、初中級(A2/B1)が使用されている。

JF 講座の開講以来、運営の中心を担ってきたのは、日本語上級専門家（以下、上級専門家）であるが、様々なニーズを持つ学習者への対応は各非常勤講師がそれぞれ行ってきた。そのため、講座の到達目標が不明確になり、担当講師によって教える内容にばらつきが見られた。本報告は、JF 講座を担当する講師が、『まるごと』の理念を理解し、講座の問題点の共有とコースの目標設定を明確にするために行われている実践の過程報告である。まず、実践の背景に触れ、講座の課題や問題点について述べる。次に、ロールプレイ試験を使用した JF モスクワ・オリジナル評価ガイドラインの開発に向けた実践の内容を報告する。

2. 実践の背景

初めに JF 講座の運営状況を詳しく述べる。同講座は 2008 年の講座開講以来、年々規模を拡大し、2017 年 6 月現在、全 10 クラス 181 名の学習者が在籍している。日本語講座の専任スタッフは日本から派遣される上級専門家とロシア人スタッフ（アルバイト）の 2 名のみである。JF モスクワ事務所は、暫定事務所であり、ロシア国内で営利活動が行えないため、有料の講座が開講できず、専任のスタッフも配置できない。その結果、各レベル週 2 回の授業を担当しているのは、現在 12 人いる非常勤講師である。授業はロシア人講師と日本人講師がそれぞれ 1、2 コマずつ担当しているが、そのほとんどは大学や民間企業に籍をおいている。フリーランスの通訳業などに従事している者も多い。そのため、講師が各学期の開始時と終了時に行われる講師会に参加したり、講座運営に関わる時間を確保したりするのは非常に難しい。授業以外の運営業務が発生した場合、まず上級専門家が予算を確保した上で、その仕事内容や時間数が決められ、各講師に依頼される。当然、予算にも上限があるため、長時間業務を依頼することは

できない。また、JF モスクワは全ロシア国立外国文献図書館内に事務所があり、教室として使えるのは一室のみである。その教室も日本文化講座や各種行事で使用されるため、日本語の授業は地元の大学機関の教室を借りて行っている。よって、講師が一堂に集まり、情報交換したり授業の準備をしたりする場がない。講師達は、担当日に指定された大学の教室に行き、授業を行う。担当曜日が違えば、講師同士が顔を合わせる機会は半年に一度しかない。現時点では、定期的な勉強会なども行われておらず、教科書が『まるごと』に移行後の講座開講以来、『まるごと』が持つ理念やその長所が講師に浸透しないまま、授業が行われてきた。JF 講座の到達目標や存在意義を講師間で話す機会もなく、講座運営や授業の問題点が解決されることはなかった。学習者からの要望も、各講師がそれぞれ自分の裁量で対応していた。当然、対応には個人差が生じた。例えば、報告者は、JF 講座現地講師研修第 2 段階に参加するにあたり、実践のテーマを「『まるごと』の理念と受講生のニーズを考慮した『まるごと初中級 A2/B1』に準拠した宿題シートの作成」に設定した。これは、初中級で躓く学習者が多いという現状に基づいたテーマではあったが、講座全体の賛同を得られず、途中で立ち消えになってしまった。問題点があっても、講師間で共通した理念を持たなければ、結局は場当たり的な対応になってしまう。また、各学期末に行われる学習者アンケートにも、毎回学習者から様々な要望が寄せられていたが、イニシアチブをとって問題を解決しようとする講師が現れる環境ではなかった。学期終了後は、すぐに次学期の準備が始まるが、現地採用の専任講師がいないため、通常の講座運営業務や講座スケジュールの調整、受講生の選抜試験や面接、教室の手配やビジターセッションのゲスト募集などの業務は、すべて上級専門家が負うことになる。講師が同じ問題意識を共有していなければ、上級専門家も講座の問題解決に手をつけることはできない。

JF 講座には様々なニーズを持った学習者が集まるため、講座や講師に対する要求も毎学期多岐に渡る。一例を挙げれば、2016 年春学期終了時のアンケートでは、「文法の学習時間が少ない」や「漢字学習の時間数が少ない」などの声があった（【図 1】参照）。「文法」や「漢字」学習に関する要望は 2016 年に限らず、毎回アンケートに寄せられている。

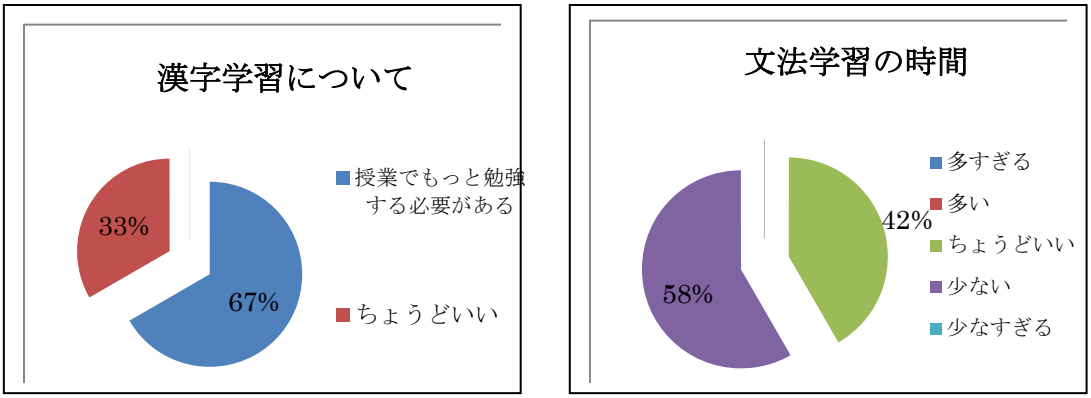
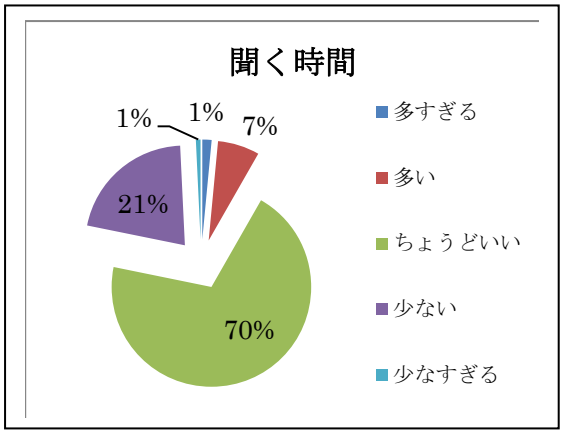
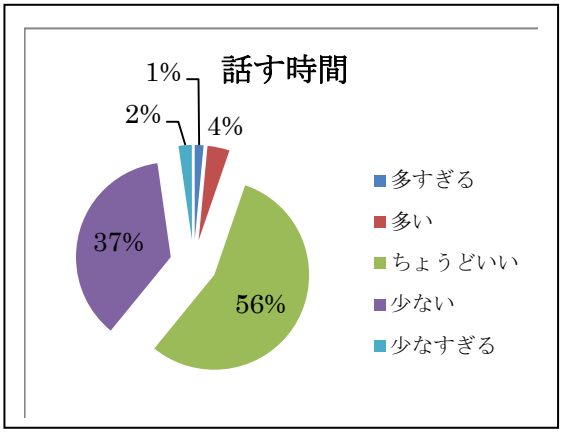


図 1　2016 年春学期終了時アンケート結果（回答者数 104 名）

『まるごと』は、日本語を使ってコミュニケーションすることが主眼となっており、文法や文型の知識を増やすことは主たる目標にはなっていない。また、漢字学習についても、読み方を覚えることが重視されている。ロシアの外国語教育では、初中等教育のレベルから一貫して文の構造分析や翻訳に重点が置かれてきたため、学習者は外国語を専門としていなくても、文法・文型にこだわる傾向が強い。また、漢字学習も、読み書きの知識だけではなく、その歴史やデザインなどの観点から興味をもつ学習者が多く、漢字に触れる時間を増やしてほしいという声も聞こえる。モスクワには、大学を初めとして多くの日本語教育機関があるが、一般の学習者を受け入れる会話コースや中級以降のコースがほとんどない。アンケートでは、講座における「話す時間」「聞く時間」「日本文化への興味」についても調査を行った。アンケートの結果からも、学習者の興味が必ずしも文法や漢字学習だけに向いているのではないということがわかる。以下はアンケートの集計結果である。





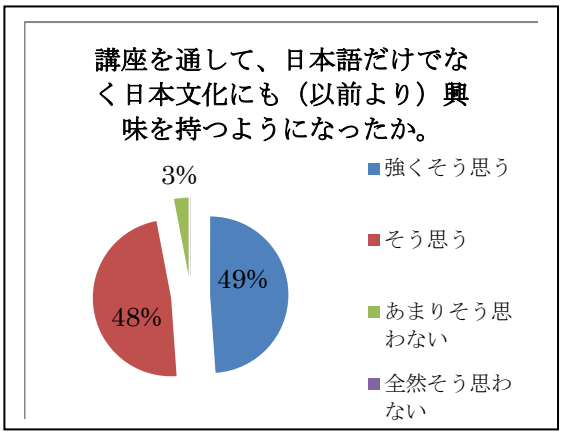


図2　2016年春学期終了時アンケート結果
（回答者 104 名）

JF 講座は、入学希望者の多さから見ても、様々な学習者の受け皿としての役割を果たしている。年 2 回行われる JF 講座入学の書類選考には、計 1000 通以上の申込書が送られてくる。JF 講座には、『まるごと』を使用するコース以外の授業は開講されていないので、同コースで様々な希望を持つ学習者を受け入れざるを得ない。もちろん、JF 講座開講以来、『まるごと』の理

念に興味をもち、コミュニケーション主体の学習スタイルを歓迎する学習者も着実に増加している。

これらの結果と JF 講座が置かれている現状を踏まえ、JF 日本語講座の目標を実現可能なものに再設定する必要がある。学習者のニーズを分析し、その結果を元に講座を運営していくのが本来の姿なのであろうが、まずは、講座自体の理念や目標、さらには講師の考え方や教授法を統一するのが先決である。モスクワの日本語学習者のニーズといった拠点特有の問題について考えるためには、『まるごと』を使用する JF 講座の根本を見直し、土台をしっかりと築くことが必要である。そのためには、講師の意識改革が先決である。そこで、JF 講座の目標を「日本語を使ったコミュニケーションと異文化理解」と設定し、『まるごと』の理念である課題遂行能力とコミュニケーション能力とは何かを講師間でしっかり共有するためにはどうすればいいかを考えることを実践の目標とした。JF 講座では、A1 から B1 までのレベルを扱うため、講座の理念や目標の設定があいまいだと、3 年間の一貫したコースで『まるごと』を使用する意味が見出せなくなってしまう恐れがある。

3. 実践内容

2 で述べたような背景のもとで、どうすれば各講師が講座の理念や目的を共有でき、『まるごと』を効果的に使えるようになるのかを考えた。これまで講師は JF スタンダード、『まるごと』、Can-do などについてじっくり学ぶ機会がないまま授業を行い、学期末には Can-do が考慮されていない試験で受講生を採点し、進級の評価を決めていたという状況も反省する必要があった。

このような現状を打開するため、実践目的を「モスクワ JF 講座オリジナル評価ガイドラインの開発」とした。これは、講師間で評価法を共有することにより、同じ指標で日々の授業や学習評価を考えることができると考えたからである。もちろん、このような目的は、一講師が勝手に決めるべきものではなく、講師間で問題が共有された上で設定されるのが理想的である。しかし、講師が講座の問題に対し、意見を述べるような場や機会はなく、リーダーシップを取るような講師もおらず、当然、その業務を保障するような予算も確保されていない。そのため、まずは講師が自由に意見交換できる雰囲気作りから始める必要があった。活発に意見交換できれば、講師間で同じ指標や価値観が共有でき、活発なやりとりが促され、各講師の日本語教育観や学習観を更新・醸成できるのではと考えた。そこで上級専門家のアドバイスを参考に、報告者が「モスクワ JF 講座オリジナル評価ガイドラインの開発」を最終的な目標に設定し、その目標遂行のため、４つのワークショップを順次実施することにした。その過程で講師のモチベーションが向上し、授業だけでなく講座運営や到達目標に講師たちの意識を向けるきっかけとなればよいとの思いもあった。

予定されたワークショップは、①テキスト『まるごと』の特徴とは何か、②JF 講座における

「評価」についての再考、③JF 日本語教育スタンダードの A1-B1 レベルに準拠した JF モスクワ日本語講座オリジナルのロールプレイ試験の開発、④評価法の共有の 4 つである。③④の実践的なワークショップに入る前に、各教師の JF スタンダードや『まるごと』の理解度を確認する必要があった。そこで、上級専門家の協力を仰ぎ、2017 年 2 月、外国語文献図書館の部屋を借り、まず①②のワークショップを連続して実施した。午前中（10:00-12:00）のワークショップ(1)では「教科書分析」、午後（13:00-15:00）のワークショップ(2)では「評価」を取り上げた。参加者は、上級専門家 1 名、非常勤講師 11 名であった。以下、各ワークショップの内容と流れの詳細を述べる。

3.1 ワークショップ(1)

ワークショップ(1)では、まず、『まるごと』と他の代表的な日本語教科書との分析・比較を通して、『まるごと』の特徴を再確認するのが狙いであった。取り上げた教科書は、『まるごと』、『みんなの日本語：初級 1』、『できる日本語』、『初級者のための日本語（ロシアの代表的な日本語教科書。Nechaeva 著)』の 4 点。グループ別にそれぞれの教科書を分析し、その到達目標と理念を話し合い、発表するという形式であった。ワークショップの内容は以下の通り

(ア) 2 グループに分かれ、4 種類の教科書のコピーを配布。

(イ) グループ内で教科書の「目的」「理念」「シラバス」がどうなっているかを比較検討。

(ウ) 各グループのコメントを A3 用紙記入にまとめで発表。

(エ) 全体でディスカッションし、質疑・応答を行う。

以下の【写真 1】は、」ワークショップ(1)で行った教科書分析の様子である。参加者が 4 種類の教科書の特徴をそれぞれ書き出し、比較・検討している。

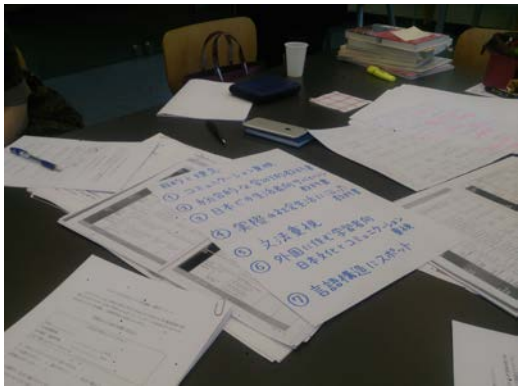


写真 1：ワークショップ(1)の様子

ワークショップに参加した講師達の日本語教授歴は様々で、使用してきた教科書もそれぞれ異なっていた。だが、ほとんどの講師に教科書分析の経験はなく、ワークショップは新鮮な体験だったようだ。説明されるだけでは教科書の特徴は捉えにくいが、比較することによって『ま

るごと』の理念がより鮮明になったとの声も聞かれた。ロシアの日本語教育の現場では、学習者のニーズに合わせて教科書が選ばれるのではなく、教師自身が学習者だった時代に使用した教科書で授業が行われる傾向がある。教科書分析のワークショップ自体は珍しいものではないのだが、ロシアの教育現場ではまだまだ意義があると言える。

3.2 ワークショップ(2)

「評価」についてのワークショップ(2)では、国際交流基金が開発した JF 日本語教育スタンダード準拠の「ロールプレイテスト」を手掛かりに、講座の「評価」に関する質的妥当性を検討することが目的であった。JF 講座では、各学期末に筆記・口頭試験が行われ、出席率なども鑑み進級を決めているが、その評価方法は『まるごと』の「活動編」各課に設定されている Can-do に沿ったものではなかった。以下は 2017 年 6 月現在の学期末口頭試験の一部である。

口頭試験　質問項目　31 レベル（初級 2A2, L13-初中級 A2/B1, T3）
１）歴史と文化の街
①　ロシアや日本、その他外国の名所について教えてください。 ②　そこはいつ頃建てられたものですか。 ③　____さんは、そこに行ったことがありますか。
２）生活とエコ
①　_____さんは、エコ活動をしていますか。 ②　_____さんは、サイズが変わって、服が着られなくなったらどうしますか。 ③　どんな環境問題がありますか。
３）人生
①　____さんは、どんな子どもでしたか。 ②　どうして日本語の勉強を始めたんですか。 ③　日本語の勉強はどうですか。

このような、口頭試験については、以前から上級専門家をはじめ、数人の講師から『まるごと』を使用したコースの口頭試験として妥当なのかという疑問の声が上がっていたが、各講師間での『まるごと』への理解度や JF スタンダードの浸透度に差があり、実現できていなかった。講師達が共通の評価指標を持たないまま、試験を改訂すると、評価に差がでてしまう恐れがあった。また、『まるごと』の内容は、日本訪問や日本人とのコミュニケーションの経験のない学習者にとって、やや現実味に欠ける部分がある。そのため、モスクワの日本語学習者向けの口頭試験開発の必要性もあったが、本格的に取り組む時間も人手も足りないため手つかずのままだった。そこで、このワークショップ(2)を「将来的な口頭試験改訂の準備」と位置付け、JF スタンダード準拠ロールプレイテストの音声データを自ら評価することにより、今までの自分の評価法を振り返ることを目指した。ワークショップの流れは以下の通り。

(ア)「ロールプレイテスト」の音声データを視聴し、先入観なく事前資料なしで、講師が各自レベルを判定する（A1-C2)。その判定結果について話し合いを行う。

(イ)「ロールプレイテスト」の概要を配布（資料編「判定の指標」A1-C2)。確認後、再度データ視聴。講師が各自で「判定の指標」をもとにレベル判定し、答え合わせ後、全体で意見交換。

(ウ)ロールプレイテストの判定、実際の進め方の例、実施の流れなどを確認。

ワークショップ(2)の終了後、JF 講座におけるロールプレイテストの今後の活用について話し合った。さらに、学期末試験でのロールプレイテストの活用が検討され、１）レベル判定ではなく､各レベルの到達度のみのチェックであれば短時間で実施できるという利点がある､２）モスクワという文脈により適したロールカードやガイドラインを作成する必要がある、という結論に達した。

写真 2:ワークショップ(2)の様子：ロールプレイテストの音声データを視聴する講師たち

また、ワークショップ(2)を実施するにあたり、ロールプレイテストの概要をより深く理解してもらうために､JF 日本語教育スタンダード準拠ロールプレイテスト〔テスター用マニュアル〕のロシア語訳を部分的に行った。ロシア語訳を行ったのは、実際に講座の授業を担当する講師が翻訳することにより､よりロールプレイテストへの理解を深めてもらおうという意図である。マニュアルの分量も多く、未だ全訳には至っていないが、完成すればロシア人講師のロールプレイテスト判定指標の理解の手助けになると思われる。また、講師の入れ替わりがあった場合も、ロシア語訳があれば、できるだけ早くロールプレイテストに馴染んでもらうことも可能になる。以下は､『JF 日本語教育スタンダード準拠ロールプレイテスト〔テスター用マニュアル〕第二版』22p〈A2 の判定の指標〉と〔3〕やりとりと判定の実例のロシア訳の抜粋である。

<Критерии оценки уровня A2>

Может поддержать базовую беседу, необходимую для повседневной жизни		Не может поддержать базовую беседу, необходимую для повседневной жизни	
A	B	C	D
Справился с заданием, без труда, простыми словами ответив на простые реплики собеседника и передав необходимую информацию. Также может добавить несложное мнение или впечатления.	Справился с заданием, без труда, простыми словами ответив на простые реплики собеседника и передав необходимую информацию. Однако, самостоятельно разговор продолжить не может.	С помощью простых слов и жестов отвечает на несложные вопросы собеседника, но не может передать необходимую информацию и не справляется с заданием.	Не может ответить на несложные вопросы собеседника ни с помощью слов, ни с помощью жестов. Не может передать необходимую информацию.

【A2 レベルの「判定の指標」】

Пример диалога	Обоснование оценки
И： いらっしゃいませ。 **У： えー、すみません。私はこの服が、あー、好です。** **色が好きです。でも、サイズはちょっと大きいです。** **もっと小さいのサイズがありますか。①** И： 小さいサイズ。ちょっと探してきますね。すみません、 このサイズはもうね、えーとこれで終わりなんですが。（A） **У： あー、これだけですね。** И： こっちの色だったらありますけど。このサイズ。（B） **У： でも。この色が好きですから、＜あ、そうですか＞** **あー、残念ね。②** И： はい、わかりました。すみません。 **У： じゃあ、また来ます。** И： えっと、あと一週間ぐらいしたら、あのう。 **У： 一週間？ありますか？じゃあ、来週またここに来ます。③** И： わかりました。ありがとうございます。	①Может объяснить что хочет и спросить совета = отвечает без затруднений, простыми словами, с заданием справился. ② Может самостоятельно поделиться простыми впечатлениями. ③ Может добавить от себя несложную информацию.

【A2 レベルの「やりとりと判定の実例」】

3.3 ワークショップ(3)

(1)(2)のワークショップに続き、2017年9月の秋学期直前にワークショップ(3)(10:00-15:00)を行った。場所は、 JFモスクワ日本文化センター、参加者は上級専門家1名、非常勤講師11名であった。ワークショップ(3)の目的は、JF 日本語教育スタンダードの A1-B1 レベルに準拠した JF モスクワ日本語講座オリジナルのロールプレイ試験の開発であった。ワークショップ

(3)は以下のような流れで行われた。

(ア)講座の理念・目的や内容の振り返り。

(イ)ワークショップ(2)で実施した「ロールプレイテスト」の評価指標に合わせて自分が担当するレベルの目標（Can-do）やトピック、表現などの確認。

(ウ)テスターマニュアルの応用編：テストのカスタマイズを利用し、新しいロールプレイの作成法を学ぶ。

(エ)グループ別（担当レベル別）にロールプレイ案の作成（作成するロールプレイは 1 つ)。タスクが達成できたかどうかを明確にするために、ロールプレイによって引き出す内容と想定会話を作成する。

(オ)ロールプレイ案を検討し、最終目標を確認する。

ワークショップではまず、JF 上級専門家の協力のもと、JF 講座が行うべきテストの内容について確認した。JF 講座の目標を、現時点で「日本語を使ったコミュニケーションと異文化理解」を教え、『まるごと』の理念である課題遂行能力やコミュニケーション能力を育成すると設定し、『まるごと』の理念に沿ったものにした。この目標をまず踏まえた上で、将来的にロシア人学習者のニーズやモスクワという文脈をどうやって授業計画やコースデザインに落とし込んでいくかを考えることにした。

JF 講座では、進級試験で、学習者のレベルチェックができればよく、レベル判定テストを作成する必要はない。よって、まずは到達度をチェックするロールプレイの作成を講師間で確認した。また、学習者の負担を減らすため、少しでもモスクワという文脈にあったロールプレイテスト作成のため、学習者の興味関心と『まるごと』各課で扱われるテーマとの擦り合わせを行った。次に、講師が担当するレベル別に 3 グループ(（入門 1 前半（A1)、入門後半から初級前半(A1-A2)、初級 2 後半(A2)）に分かれ、「ロールカード」、「対応する Can-do（講師がそれぞれ担当する教科書の範囲内の Can-do を選び、JF 講座用に若干手を加えたもの)」、「タスク達成の手がかり」、「想定会話」などを表にまとめた。ワークショップ時には、各グループがそれぞれ３つのロールプレイ案を作成した。以下に各レベルのロールプレイ案を１つずつ紹介する。残りは添付資料 1 を参照されたい。なお、下記の案はワークショップ時に書かれたメモを筆者が文書に起こしたものである。内容や文章の修正は一切行っていない。

入門前半 A1①

レベル	初級 1 A1（『入門』 ～『初級 1』L6 まで）
担当	担当講師（4 名）
ロールカード	JF 講座のビジターセッションに日本人が来ました。自分のことを話してください（自己紹介をしてください）
Can-do	・自分のことを簡単に話します。 ・家族のことを簡単に話します。

	・趣味について話します。 →家族や趣味の話を入れて、自己紹介を簡単にする。
タスク達成の手がかりとして引き出す内容	・名前を言えるか。 ・仕事、家族、趣味について言えるか。
想定会話	**想定会話** T：こんにちは、はじめまして。山田です。 S：こんにちは、はじめまして。_____です。どうぞよろしく。 T：私は主婦です。お仕事は？ S：_____です。 T：家族は何人ですか。誰と住んでいますか。 S：_____です。父と母と妹です。 T：趣味はなんですか。 S：_____です。 T：どんな_____が好きですか。（を見ますか、をしますか、ができますか） S：_____が好きです。（をします、ができます） T：そうですか、ありがとうございます。

入門後半から初級前半(A1-A2)①

レベル	初級 1 A1(『初級 1』L7～L 18)
担当	担当講師（3 名）
ロールカード①	日本人の友達が電話でグムに行きたいと言っています。今どこにいるか聞いて道を教えてください。
Can-do	・場所の行き方を言います。
タスク達成の手がかりとして引き出す内容	・今、どこにいるか聞く。 ・どうやっていくか説明する。
想定会話	**想定会話** T：もしもし、マリアさん、こんにちは。 S：こんにちは。 T：すみません、グムに行きたいんですが、道を教えてください。 S：いま、どこにいますか？ T：モスクワ大学にいます。 S：モスクワ大学から 5 分歩いて、地下鉄のウニベルシテート駅で赤い地下鉄にのります。アホートニー・リャッド駅まで行ってください。アホートニー・リャッド駅から 10 分歩いてください。 T：わかりました。ありがとうございます。 S： どういたしまして。

初級 2 後半(A2)①

レベル	初級 2 A2（『初級 2』 L1～『初中級』T4）
担当	担当講師（3 名）
ロールカード①	①あなたは今、日本人の友達とロシア料理のレストランにいます。友達におすすめの料理を説明して、注文を決めてください。
Can-do	・案内したレストランでおすすめの料理について話します。
タスク達成の手がかりとして引き出す内容	・何を食べるか ・どんな料理か ・おすすめの料理について詳しく説明できる。
想定会話	**想定会話** T：この店のおすすめは何ですか。 S：この店でいちばんおいしいのは、ペリメニです。 T：ペリメニはどんな料理ですか。 S：日本のギョウザに似ています。 T：何が入っていますか。 S：肉や野菜が入っています。 T：どうやって食べますか。 S：サワークリームをつけて食べます。おいしいし、食べやすいですよ。 T：そうですか。食べてみたいです。 S：じゃあ、それにしましょう。

上記のようにワークショップ(1)と(2)は 2017 年 2 月、ワークショップ(3)は 2017 年 9 月に実施した。前者と後者の間は 7 ヶ月ほど空いており、非常に遅々とした進行状況ではある。しかし、1 学期に 2 回ほどしか行われない講師会の枠内でワークショップを行うのは非常に難しい。解決策として講師間の意見交換を少しでも活発にするため、SNS を利用した「モスクワ JF 講座」のグループページを開設した。

(1)～(3)のワークショップの終了を受け、今後、2018 年 1 月の秋学期終了前に、担当レベル別に集まり口頭試験に使用するロールプレイを完成させる予定である。その後、作成したロールカードにより試験を実施し、フィードバックを得たいと考えている。現在、作成したロールプレイカードは、フェイスブック上の講師グループのページに掲載されており、講師間での意見交換を行っている状態である。残念ながら、現時点で活発なフィードバック・意見交換があるとは言えず、講師間でも、問題解決に対する意識の差がまだまだ見られる。

4. ワークショップの成果と課題（参加者の声）

過去 3 回のワークショップで講師の考え方がどう変わったのかを知るため、ワークショップ終了後、数人の講師にアンケートを行った。アンケートは日本語で質問の内容は以下の 5 つである。

a. JF スタンダードの理念について、どう思いますか？わかりにくい点や自分の考えや意見と違う点を教えてください。

b. 『まるごと』を他の教科書と比べて気が付いた点を教えてください。（例えば、『まるごと』と JF スタンダードとの関係、課題遂行能力やコミュニケーション能力について、異文化理解能力についてなど。

c. 過去 2 回のワークショップ（2017 年度 2 月・9 月）に参加して、ご自分の日本語教育や日本語学習についての考え方や信念が変わりましたか。変わったのであれば、どんな点が変わったのか教えてください。

d. ロールプレイテストを自分たちで作ってみて感じた点や気がついた点、難しかった点などを教えてください。

e. モスクワ JF 日本語講座の運営やプログラムには、他機関の日本語講座と比較した場合、どんな利点があると思いますか。また、反対に問題点があると思いますか（ロシア学習者のニーズなどを鑑みた場合）。

残念ながら、本報告執筆時では、ワークショップに参加した講師全員からアンケートの回答は得られていない。本報告では、現時点で回答を得ている 3 名の非常勤講師の上掲 b、c、d の質問に対する回答をまとめる。（全質問に対する回答の詳細は、添付資料 2 を参照のこと）。３名の回答者の勤務年数、担当レベル、職業等の基本情報は以下の通り。なお、回答を公表することに許可を得ており、報告者はその文章や内容には一切変更を加えていない。

	性別	JF 講座勤務年数	担当レベル	職業
講師 A	男性	3 年	入門/初級 1/ 初級２	大学講師
講師 B	女性	4 年	入門	事務・通訳・教員
講師 C	女性	1 年未満	初級１	日本語教師・翻訳業

4.1 質問 b について

『まるごと』を他の教科書と比べて気がついた点として、3 名とも「コミュニケーション能力」を伸ばせる内容となっている点を評価していた。また、2 名が異文化理解を促す内容（写真などの有効活用）が豊かな部分を評価していた。一人の講師は、「社会人でも無理なく学習を続けられる内容であり、近い将来に日本を観光で訪れ日本語を使ってみたいといったライトな層にとっては有用」と述べ、実際の場面で使える日本語能力を育成できる点を評価している。その一方、3 名中、2 名が文法説明や文法練習が少ないことを課題に挙げていた。

4.2 質問 c について

2回のワークショップを受けて、自分の日本語教育や日本語学習についての考え方や信念が変わったかどうかについては、3名の講師がそれぞれ以下のようなコメントを残している（下線部は報告者による）。

【講師A】

「...一回の授業ごとのCan-doを意識することはもちろんだが、学期開始の時点から学期終了（テスト）の時点までにグループのレベルをどこまで、またどのように上げていくかを意識するようになった。それは2回目のワークショップで実際に試験問題を作成してみたことに起因する。これまではJFの枠組みや「まるごと」の理念から外れないようにという考えにとらわれるあまり、毎回の授業において与えられた事柄だけをするという受身的なスタンスに陥りがちだったが、主体的に授業やテストを捉えていく当事者意識を持つようになったと感じている。...」

【講師B】

前は、外国語の学習過程には一番大事なのが言語の基礎（構造、文法など）だと思っていて、それにこだわり過ぎていた感じがします。ただし、外国語を勉強している目的は、実際に使えるようになるためだということが多いと考えているので、確かに課題遂行能力やコミュニケーション能力を伸ばせるのが一番役に立つということが分かったのです。文法をいっぱい勉強していても日常会話などのコミュニケーションができないという人が少なくないと思います。そうだと、明らかに目的を達成していないということになるのです。...」

【講師C】

今までは大学や語学学校などで、文法をしっかり教えて、間違いは直す、という教え方をしてきたので、ワークショップでの課題遂行能力の評価で、文法的に間違いはあっても、課題が遂行できていればよしとする、という考え方は、自分にとって新しいものだった。

三者三様、表現は異なっているが、上掲のコメント、特に下線部に注目すると、各講師がワークショップに参加する中で、これまでの自分の教育観を振り返り、それらとJFスタンダードや『まるごと』が重要視している「課題遂行能力」や「コミュニケーション能力」がどう関わっているのかについて、新しい気づきがあったことがわかる。

4.3 質問dについて

ロールプレイテスト作成の中で感じた点や気がついた点、難しかった点等については、全員がロールカードや想定会話作成の難しさを述べていた。具体的なコメントとして、「タスク達成の手がかりとして引き出す内容があいまいだったり、想定会話が十分に練られていなかったりした。」「充実したロールプレイカードを作成するのはかなり難しいということが分かりました。ロールプレイの内容は、実際の生活の中に出てきそうな場面、学習者が以前勉強してい

て使いそうなもの（語彙、文型などの面からすると）、多方面から評価できるものにしなければならないからです。」「受講者のレベルに合わせた語彙や文法を適切に使いながら、タスク遂行を評価できるような会話を作成するのは難しかった。」のようなコメントがあった。下線部のコメントを見ると、3 名の講師が学習者のレベルや既習項目、モスクワで実際に遭遇しそうな場面などを考え、タスク達成について、自身の考え方を深めていたことがわかる。

5. 実践の成果とこれからの課題

残念ながら現時点では、実践の成果について述べることはできない。講師に対する継続的なモチベーションの維持が必要であるし、講師が自分の教授法を見直す機会の提供もまだまだ少ない。アンケートの回答も講師全員から得られたわけではなく、ロールカードのフィードバックもまだ不十分である。ワークショップ(1)(2)(3)で行った活動を、今後評価法の共有にどう生かすかが、課題である。JF 講座オリジナル評価ガイドライン完成を目指す過程で、講師間の活発なやりとりや『まるごと』の理念・Can-do の 理解、JF 講座の在り方について、検討がなされるのが理想的であるが、ロシアの日本語教師には馴染みの薄い概念（課題遂行、Can-do、ポートフォリオ、自律学習など）がまだまだあるため、講師会などの活動を通して各講師の日本語教育・学習観が少しでも更新・醸成されればいいと考えている。機会があれば、4 回目のワークショップ終了後の講師の意識変化を講座の現状などと合わせ、まとめたいと思う。

今後の予定としては、2018 年 2 月、ワークショップ(4)を開催する予定である。ワークショップ(4)では、各開講レベルの JF 講座オリジナル評価ガイドラインの作成を考えている。(3)で作成したロールプレイカードを実際に学期末試験で使用し、フィードバックを得、再検討した後にガイドライン作成に取り掛かる。実際に担当している講師はもちろん、新しく採用された講師でも同じ判定が得られるようなガイドラインを目指す。ガイドラインはテスターマニュアルの「テスター用ガイドマニュアル」を参考にし、JF 講座オリジナルのマニュアルを作成する予定である。

最後になってしまったが、様々な運営上の困難があるなかで、根気強くその改善に尽力している上級専門家に感謝の意を表したい。そして、講座を支えている非常勤講師のスタッフにも感謝したい。JF 講座が現在まで維持できているのは、講師たちの力によるところが大きい。授業はもちろんのこと、副教材の作成や語彙リスト・文法解説書の翻訳、各種行事や受講生募集などの業務にもできる範囲で関わってくれている。また、一部の講師は時間外でも熱心に指導にあたり、受講生のモチベーションアップに一役も二役も買っている。仕事を抱えながら 1 クラス約 20 名の宿題を添削するだけでも大変な労力である。日本語講座は、講師達のボランティア精神によって継続されているといっても過言ではない。受講希望者の数は減るどころか年々増加している。講座や講師のレベルを上げるためにも、教授環境の整備や講師の待遇改善を願

っている。

参考資料/参考サイト

国際交流基金（2017）JF 日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック　国際交流基金

国際交流基金(2016)JF 日本語教育スタンダード準拠ロールプレイテスト【テスター用マニュアル】第二版　国際交流基金

https://jfstandard.jp/pdf/roleplay/JFS_roleplaytest_manual_20170131.pdf

以上

資料 1

入門前半 A1　ロールプレイ案　②

レベル	初級 1 A1（『入門』 ～『初級 1』L6 まで）
担当	担当講師（4 名）
ロールカード②	モスクワに住む、日本人の家に泊りに行きました。朝ごはんについて話して、好きな食べ物について答えます。
Can-do	・好きな食べ物が何か話します。 ・朝ごはんの習慣について話します
タスク達成の手がかりとして引き出す内容	・好きです、好きじゃないですが言える。 ・食品の名前を知っているか。
想定会話	**想定会話** T：明日、朝ごはんを食べますよね。 S：はい、食べます。 T：食べ物は何が好きですか？ S：魚・卵・パン…が好きです。 T：そうですか。肉は。 S：肉はあまり食べません。好きじゃないです。 T：飲み物は何を飲みますか。 S：コーヒーをのみます。

入門前半 A1　ロールプレイ案　③

レベル	初級 1 A1（『入門』 ～『初級 1』L6 まで）
担当	担当講師（4 名）
ロールカード③	モスクワで日本人観光客に道を聞かれました。教えてあげてください。(準備：今いる場所が示されている地図)
Can-do	・近くの場所への行き方を言います。 ・相手が聞き間違えたことを直します。 ・遠くに見える建物の特徴を言います。

タスク達成の手がかりとして引き出す内容	・まっすぐ曲がるなどの言葉が出てくる。 ・左右を間違えずに言える。 ・日本語の地図を見て説明できるか。
想定会話	**想定会話** T：すみません、日本語ができますか。 S：はい、少し、できます。 T：すみません、ボリショイ劇場に行きたいんですが… S：ボリショイ劇場ですか？ T：はい。 S：地図はありますか。 T：はい、いまどこですか。 S：今は、ここです。二つ目の角を右に曲がってください。 T：えっ、1つ目の角ですか。 S：いいえ、1つ目じゃなくて2つ目ですよ。 T：2つ目ですね。 S：そこに大きい広場があります。そのとなりです。 T：はい、わかりました。ありがとうございます。

入門後半から初級前半(A1-A2)　ロールプレイ案　②

レベル	初級1 A1(『初級1』L7～L18)
担当	担当講師（3名）
ロールカード②	もうすぐM先生の誕生日です。お祝いに何をするか決めてください。
Can-do	・お祝いになにをするか話します。
タスク達成の手がかりとして引き出す内容	・なにをするか。 ・先生の興味について話す。
想定会話	**想定会話** T：もうすぐ森林先生の誕生日です。なにをしますか。 S：プレゼントを買います。 T：なにを買いますか。 S：時計がいいと思います？ T：先生は時計が好きですか。 S：好きだと思います。 T：カードを書きますか。 S：はい、書きましょう。

入門後半から初級前半(A1-A2)　ロールプレイ案　③

レベル	初級1 A1(『初級1』L7～L18)
担当	担当講師（3名）
ロールカード③	あなたは友達と一緒にダーチャでバーベキューパーティをするつもりです。なにをもっていくか決めてください。
Can-do	・パーテイにもっていくものについて話します。

タスク達成の手がかりとして引き出す内容	・なにをもっていくか。
想定会話	**想定会話** T：来週の土曜日に バーベキューパーティをします。ナターシャさん行きますか？ S：はい、行きます。 T：食べ物はどうしますか。 S：私は野菜を買っていきます。 T：私は飲み物を持っていきます。肉はどうしますか。 S：私は肉も持っていきます。 T：おねがいします。

初級２後半(A2)　ロールプレイ案　②

レベル	初級２ A2（『初級２』 L1～『初中級』Topic4）
担当	担当講師（3名）
ロールカード②	日本人の友達はロシア旅行に行きたいです。あなたが行ったことのある町をおすすめしてください。
Can-do	・自分の経験をもとに旅行する季節などについてアドバイスします。
タスク達成の手がかりとして引き出す内容	・その町はどんなところか ・どの季節がいいか ・経験をもとに詳しくその町の名所について説明できる
想定会話	**想定会話** T：ロシアで旅行に行きたいんですが、どこがいいですか。 S：サンクトペテルブルグがいいですよ。 T：どんなところですか。 S：建物もきれいだし、人もしんせつだし、いいところですよ。 T：季節は何月がいいですか。 S：6月に行ったほうがいいですよ。白夜と跳ね橋が見られますから。 T：そうですか。行ってみたいです。

初級２後半(A2)　ロールプレイ案　③

レベル	初級２ A2（『初級２』 L1～『初中級』Topic4）
担当	担当講師（3名）
ロールカード③	ネットショッピングで買いたいものと、その理由について話してください。
Can-do	＜11-31＞今、何を、どうして買うのか話します。
タスク達成の手がかりとして引き出す内容	・何を買うか ・どうして買うか ・ネットショッピングのいいところを説明できる
想定会話	**想定会話** T：ネットショッピングをしたことがありますか。 S：はい、ありますよ。 T：今、買いたいものがありますか。

	S：日本語の教科書を買いたいです。12 月に能力試験があるので、勉強したいんです。 T：どのサイトで買いますか。 S：CD Japan で買います。安いし、何でもあるし、早くとどきます。 T：そうですか。便利ですね。

資料 2

アンケート回答 1　（「　」内が回答）

講師 A(日本人講師、男性) モスクワ JF 講座　勤務 3 年　　担当レベル：入門/初級 1、初級 1/2　　職業：大学講師
a.　JF スタンダードの理念について、どう思いますか？わかりにくい点や自分の考えや意見と違う点を教えてください。 「CEFR の Can-do に基づき明確に目標を提示しているため特にわかりにくい点はない。」
b.　『まるごと』を他の教科書と比べて気が付いた点を教えてください。（例えば、『まるごと』と JF スタンダードとの関係、課題遂行能力やコミュニケーション能力について、異文化理解能力についてなど。） 「週 2 回、社会人でも無理なく学習を続けられる内容であり、近い将来に日本を観光で訪れ日本語を使ってみたいといったライトな層にとっては有用であると思われる。」
c.　過去 2 回のワークショップ（2017 年度 2 月・9 月）に参加して、ご自分の日本語教育や日本語学習についての考え方や信念が変わりましたか。変わったのであれば、どんな点が変わったのか教えてください。（これまでの自分の教え方や評価に対する考え方が変わったかどうか。変わったのであれば、どんな点が変わったかのか、変わらなかったのであれば、どうして変わらなかったのかなど。） 「自分の中の JF スタンダードの基準を明確にすることができ、グループのレベル、グループ内の各生徒のレベルを頭の隅に置きながら授業を行うようになった。つまり、一回の授業ごとの Can-do を意識することはもちろんだが、学期開始の時点から学期終了（テスト）の時点までにグループのレベルをどこまで、またどのように上げていくかを意識するようになった。それは 2 回目のワークショップで実際に試験問題を作成してみたことに起因する。これまでは JF の枠組みや「まるごと」の理念から外れないようにという考えにとらわれるあまり、毎回の授業において与えられた事柄だけをするという受身的なスタンスに陥りがちだったが、主体的に授業やテストを捉えていく当事者意識を持つようになったと感じている。 一方で、それはあくまで意識に過ぎなく、今後どうしてもその意識が弱まっていくこともあるだろうし、各講師で認識の個人差もあるだろうから、定期的に調整していく必要があるように思う。また、今回はレベル判定についてはおそらく時間の関係で理解のみに留まったわけだが、実際に判定を行わせてみるなど、各講師のテスターとしての精度を上げていく必要もあろうかと思う。」
d.　ロールプレイテストを自分たちで作ってみて感じた点や気がついた点、難しかった点などを教えてください。 「はじめてだったとはいえ、タスク達成の手がかりとして引き出す内容があいまいだったり、想定会話が十分に練られていなかったりした。もし次回以降があるなら、さまざまな講師が揃っているせっかくの場でもあるので、発表後の講評としてもっと厳しめの指摘をどんどん行ったほうがいいのではないか（雰囲気が悪くならない程度に）。そのうえで、もう一度練り直すなど、完成度を高める作業までその日のうちにできればよかったのかなと思う。 実際に試験に使ってみるのも当事者意識という観点からいいとは思うが、あの状態のままではまず試験には

使えないのではないか。そもそも実際の試験に使用するかということが受講者はわかっていなかったのでそこまで真剣に作成していなかったように思える。」

e.　モスクワ JF 日本語講座の運営やプログラムには、なにか問題点があると思いますか（ロシア学習者のニーズなどを鑑みた場合）。また、他機関の日本語講座と比較した場合、どのような利点があると思いますか。

「他機関と比べた際の利点としては、教科書や副教材の充実ぶり、講師の質、運営の管理が行き届いている点、それらが完全に無償で提供されていることが挙げられる。

一方、問題点としては、実現すべきかどうか、実現可能かどうかの問題は別として、有償化したうえでの適正規模で運営できていないことがまずある。人口 1200 万人という都市の規模を考慮しても、年々増加しているモスクワの日本語学習者人口、JF の受講希望者数を考慮しても、そしてやる気のある講師が多くいる中で、規模を縮小せざるを得ないことは残念。

そして、中級の途中で講座が終了してしまうという点に関して、「学習をどう続けていけばいいのかわからない」「結局やめてしまった」「せっかく覚えたのに日々忘れる一方で不安だ」との声が卒業生から多く聞かれる。中級以降は自立した学習を確立して各自で継続していってほしいというのは学習者、講師ともに建前上は理解していても、全員が全員そうできてはいなく、中途半端なところで放り出されてしまったというネガティブな印象を持たれてはいないか心配。希望者向けの追加の講座や定期的なイベントなど、何らかのフォローアップの必要を感じている。」

アンケート回答 2

講師 B　（ロシア人講師、女性）
モスクワ JF 講座　勤務４年　　担当レベル:入門（現在）　職業：事務・通訳・教師

a.　JF スタンダードの理念について、どう思いますか？わかりにくい点や自分の考えや意見と違う点を教えてください。

「ロシア教育制度が求めている理念や考え方、または教え方などと比べると、かなり違うので、「まるごと」教科書を使って勉強し始めたばかりのロシア人の学習者は、違和感のある人が多いと感じています。しかし、外国語の学習目的を果たすのに効率的である活動（コミュニケーション能力や課題遂行能力を高めるもの）にかなりの注意を払っているプログラムに慣れてくると、その利点を実感できるようになると思います。」

b.　『まるごと』を他の教科書と比べて気が付いた点を教えてください。（例えば、『まるごと』と JF スタンダードとの関係、課題遂行能力やコミュニケーション能力について、異文化理解能力についてなど。）

１）「まるごと」教科書は、コミュニケーション能力がかなり伸ばせる内容なので、役に立つ
２）異文化理解に関わる中身が多くて、自分の文化と日本文化を比べながら学習できるのがいい
３）文法練習が足りない感じで、新しい文型を勉強しても、すぐに生かせるのは難しいようである

c. 過去 2 回のワークショップ（2017 年度 2 月・9 月）に参加して、ご自分の日本語教育や日本語学習についての考え方や信念が変わりましたか。変わったのであれば、どんな点が変わったのか教えてください。（これまでの自分の教え方や評価に対する考え方が変わったかどうか。変わったのであれば、どんな点が変わったかのか、変わらなかったのであれば、どうして変わらなかったのかなど。）

「前は、外国語の学習過程には一番大事なのが言語の基礎（構造、文法など）だと思っていて、それにこだわり過ぎていた感じがします。ただし、外国語を勉強している目的は、実際に使えるようになるためだということが多いと考えているので、確かに課題遂行能力やコミュニケーション能力を伸ばせるのが一番役に立つと

いうことが分かったのです。文法をいっぱい勉強していても日常会話などのコミュニケーションができないという人が少なくないと思います。そうだと、明らかに目的を達成していないということになるのです。満足度も低くなると思います。従って、学習者を評価する時は、その課題遂行能力やコミュニケーション能力のことを確認すればいいです。そのために一番適切な形は、やはりロールプレイだとことが分かりました。」

d. ロールプレイテストを自分たちで作ってみて感じた点や気がついた点、難しかった点などを教えてください。

「予想していたより、充実したロールプレイカードを作成するのはかなり難しいということが分かりました。ロールプレイの内容は、実際の生活の中に出てきそうな場面、学習者が以前勉強していて使いそうなもの（語彙、文型などの面からすると）、多方面から評価できるものにしなければならないからです。」

e.　モスクワ JF 日本語講座の運営やプログラムには、なにか問題点があると思いますか（ロシア学習者のニーズなどを鑑みた場合）。また、他機関の日本語講座と比較した場合、どのような利点があると思いますか。

問題点：
① 中級まで（B1）ちゃんと勉強させてもらいたい学習者が多い
② 入門クラスの VS の時期が早すぎる（できることは非常に少ない
　→　学期末だと、VS はもっと効率的で、楽しめるものになると思う
③ 宿題のことをもう一回話し合う必要があると思う。JF 講座全体で使える宿題資料を作成すればいい
利点：
① 母語話者の先生が教えている
② お金がかからない
③ 独自のプログラムや教科書がある
④ 教科書の内容は、日常生活に役に立つものなので、講座に対する満足度がかなり高い

アンケート回答 3

講師 C（日本人講師、女性）
モスクワ JF 講座　勤務 1 年未満　担当レベル：212　職業：日本語教師、翻訳者

a.　JF スタンダードの理念について、どう思いますか？わかりにくい点や自分の考えや意見と違う点を教えてください。

「CEFR を参考に作られ、レベルも CEFR が基になっているが、コミュニケーション重視であり、ヨーロッパ言語のように書くことがそこまで難しくない言語の枠組みを、日本語のような言語にそのままあてはめることができるのか。
　ポートフォリオの意味がまだよくわかっていない。作成することにそれなりに意味はあると思うが、それをどう評価すればいいのか。」

b.『まるごと』を他の教科書と比べて気が付いた点を教えてください。（例えば、『まるごと』と JF スタンダードとの関係、課題遂行能力やコミュニケーション能力について、異文化理解能力についてなど。）

「コミュニケーション能力を高めることや、課題遂行能力を高めることに重点が置かれているので、他の教科書と比べて、文法説明が少なくなっている。文化について、特に現代文化の説明が写真付きである点は、今のニーズに合っていると思う。」

c.　過去 2 回のワークショップ（2017 年度 2 月・9 月）に参加して、ご自分の日本語教育や日本語学習についての考え方や信念が変わりましたか。変わったのであれば、どんな点が変わったのか教えてください。（これまでの自分の教え方や評価に対する考え方が変わったかどうか。変わったのであれば、どんな点が変わったか

のか、変わらなかったのであれば、どうして変わらなかったのかなど。）

「今までは大学や語学学校などで、文法をしっかり教えて、間違いは直す、という教え方をしてきたので、ワークショップでの課題遂行能力の評価で、文法的に間違いはあっても、課題が遂行できていればよしとする、という考え方は、自分にとって新しいものだった。実際に学期末のテストをそのように評価したので、そういう意味では、考え方が変わったと言える。」

d.　ロールプレイテストを自分たちで作ってみて感じた点や気がついた点、難しかった点などを教えてください。

「受講者のレベルに合わせた語彙や文法を適切に使いながら、タスク遂行を評価できるような会話を作成するのは難しかった。」

e. モスクワ JF 日本語講座の運営やプログラムには、なにか問題点があると思いますか（ロシア学習者のニーズなどを鑑みた場合）。また、他機関の日本語講座と比較した場合、どのような利点があると思いますか。

「講座の性格上、どうしても文法知識が不十分となるが、上のレベルを目指す場合、JF 講座を終了した受講生の受け皿のようなものがない。実際にそうした受講生がその後どうしているのか気になる。ビジターセッションや期末テストなどがしっかりプログラムに組み込まれているのはいいことだと思う。

修了証を出しているので、JF の講座を修了したという証明があるのは、受講生にとって将来的に役立つと思う。」